

## 中世加賀・能登の甕・壺・鉢の生産と流通

岩瀬 由美（財団法人石川県埋蔵文化財センター）



### 生産の様相

石川県内には能登国に珠洲窯と堀松窯、加賀国に加賀窯と作見窯の計4カ所の中世窯跡が確認されている。珠洲窯は珠洲市・鳳珠郡能登町（旧珠洲郡内浦町）域で生産された須恵器系陶器で、これまでに約40基の窯が確認されており、12世紀中葉～15世紀代にかけて甕・壺・鉢の三器種を中心とした生産が行われている。堀松窯は志賀町小浦地内で灰原とみられる散布地が確認されている瓷器系陶器で、窯本体は未発見であるが、出土陶片から知られる製作技術や押印の意匠から加賀窯との関連が指摘されている<sup>(1)</sup>。甕・壺・鉢の三器種が出土しているが、壺・鉢は少なく、甕を中心とした生産が行われていたと推定され、窯の稼働時期は13世紀後半代の短期間とみられる。加賀窯は小松市戸津町から那谷町周辺で生産された瓷器系陶器で、12世紀後半に常滑窯の生産技術を導入して開窯し、14世紀後半に至るまでの14群46基の窯が確認されている。窯体構造が判明しているものは分焰柱を備えた地下式の窖窯である。生産器種は甕・壺・鉢を中心とし、中でも甕を量産している。作見窯は加賀市作見町に所在した窯で、備前窯の生産技術を導入して開窯したと推定され、16世紀末の1四半期程度の短期間の操業と想定される。生産器種は甕・壺・鉢を中心とする。

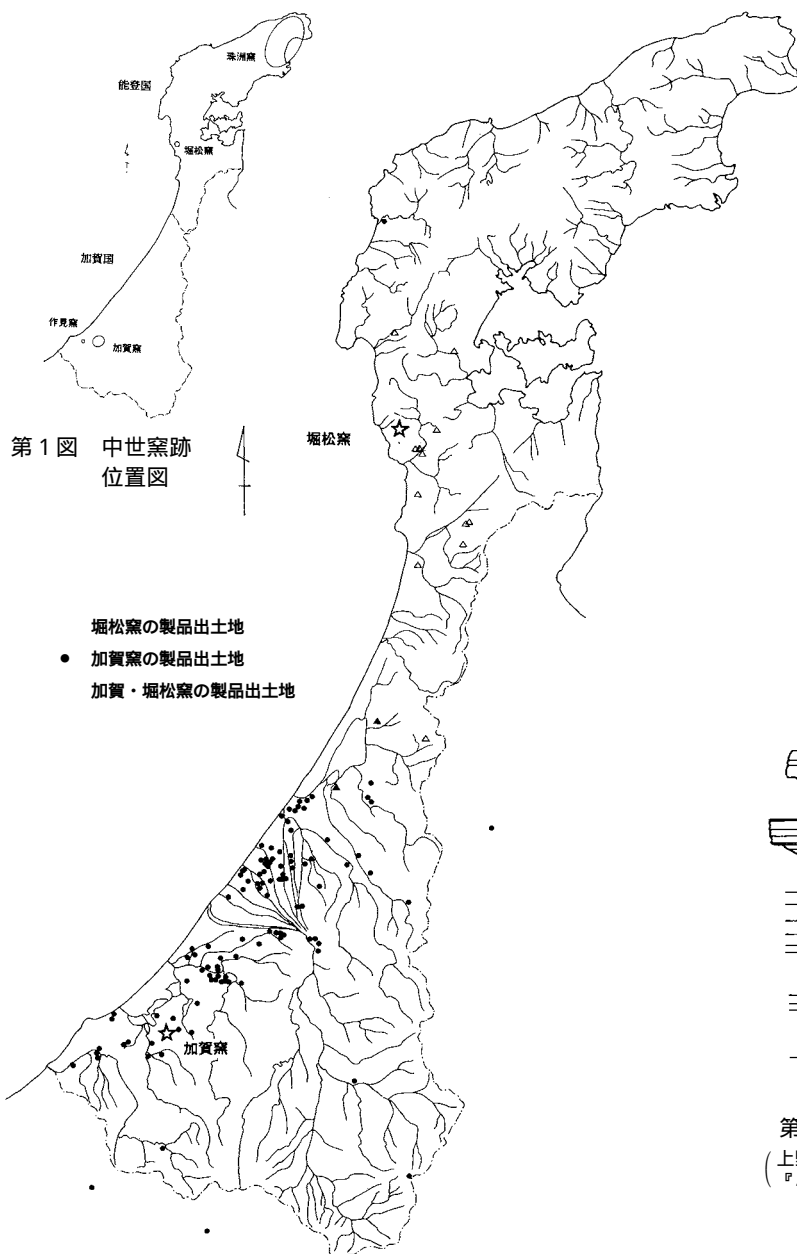
### 流通の様相

中世前期では、珠洲窯開窯以前とみられる12世紀第2四半期（常滑編年1b型式期）から能登・加賀を通じて常滑焼広口壺等の東海産瓷器系陶器が少量流通しており<sup>(2)</sup>、12世紀後半になると珠洲焼が能登・加賀の広範囲に多量かつ一気に流通する。開窯後まもなくは窯場近くの南加賀を中心とした地域を主な流通圏とし、生産の増大を図って次第に越前や越中に流通圏を広げていく加賀焼が能登には流通しないことと対照的である。能登では12世紀後半以降、珠洲焼が甕・壺・鉢ともに100%に近い割合で使用される。同じく国内で生産された堀松窯の製品は中能登を中心に出土が確認されるものの、短期間の操業であるためか流通量は極めて少ない。加賀では南加賀と北加賀で様相が異なり、南加賀では加賀焼を主体としつつも珠洲焼や越前焼が定量流通し、器種によっては珠洲焼が上回る様相を呈す。北加賀では能登と南加賀の中間の様相を示すが、三器種とも珠洲焼が主で、北加賀の北部で少量の堀松窯製品の流通も確認される。越前焼は南加賀では12世紀後半から確認されるが、北加賀での流通が確実視されるのは13世紀代に入ってからであり、13世紀代に加賀国全体が越前焼の流通圏に組み込まれたと推定される。能登においては12世紀後半～14世紀前半の越前焼の出土が散発的に確認されるものの、現時点では当該期において普遍的に流通していたとまでは言い難い。

中世後期になっても能登では14世紀後半～15世紀代は前代と大差なく、15世紀中葉以降に越前焼の流通量が甕・鉢ともに増加する。加賀では15世紀代にすでに甕は越前焼が主体となるが、鉢に関しては南加賀ですでに越前焼が卓越するのに対し北加賀では依然として珠洲焼が多くを占めることから、南加賀から徐々に甕そして鉢の順に流通量を拡大していった越前焼の様子が窺える。16世紀になると能登・加賀とも三器種全てにおいて越前焼が大半を占め、16世紀後半には新たに鉢を中心とした備前系の製品が少量確認される。実見し得た陶片の殆どは備前窯の製品と判断され、南加賀や北加賀南部で数点の作見窯の製品とみられる陶片が確認されたことから、作見窯の流通圏は窯周辺のごく狭域で、流通量も極めて少量であったと推定される。

（注1）垣内光次郎 2005 「北陸西部の諸窯 - 加越能の瓷器生産 - 」「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」資料集

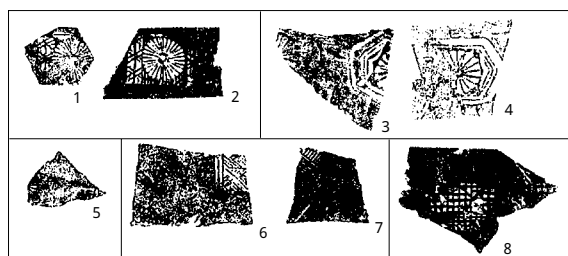
（注2）県内出土の東海産瓷器系陶器については中野晴久氏に実見していただき、ご教示を賜った。



第1図 中世窯跡位置図

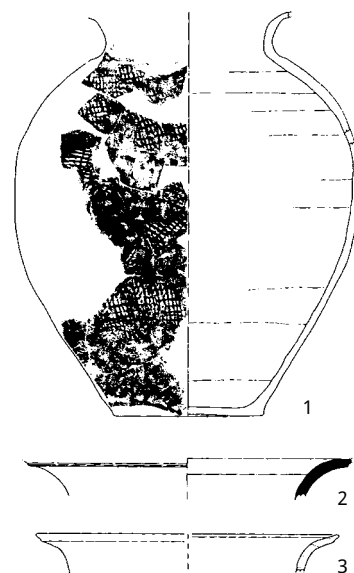
堀松窯の製品出土地  
 ● 加賀窯の製品出土地  
 加賀・堀松窯の製品出土地

第2図 加賀・堀松窯出土遺跡分布図  
 (S = 1 / 1 000 000)



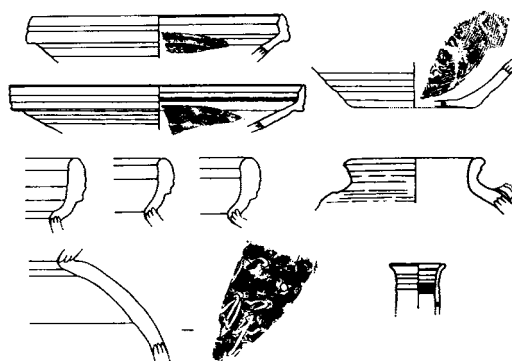
1・2：菊花文と斜格子 6・7：幾何学文  
 3・4：菊花文と六角形枠 8：正格子と×印  
 5：花文のみ

第5図 消費地出土堀松窯の押印集成 (S = 1 / 6)

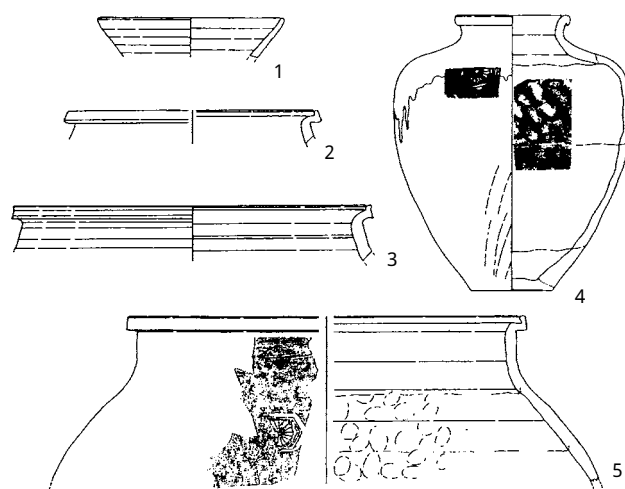


1：水白モンシヨ遺跡 2：東小室ボガヤチ遺跡  
 3：小川新遺跡

第3図 県内出土の常滑焼 (S = 1 / 10)



第4図 作見窯灰原出土遺物実測図 (S = 1 / 10)  
 (上野与一・宮下幸夫 1982「作見窯について」  
 『小松市立博物館研究紀要第19集』小松市立博物館より転載)

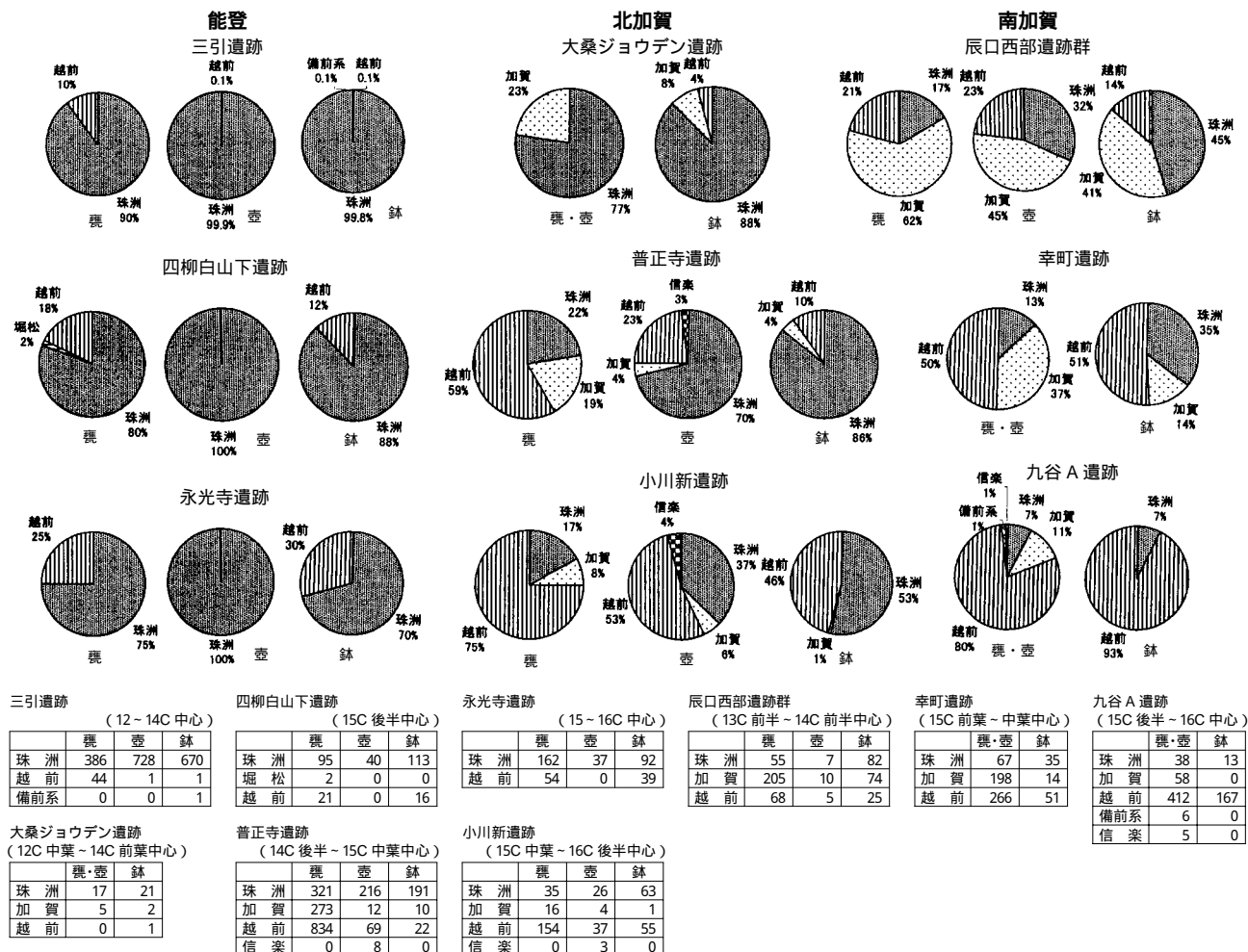


1・3：長者川遺跡 2：指江B遺跡 4：刈安野々宮遺跡  
 5：木越光琳寺遺跡

第6図 消費地出土堀松窯遺物実測図 (S = 1 / 10)

時期	甕	広口壺・壺	片口鉢	窯跡	時期	甕	広口壺・壺	片口鉢	窯跡
1150 (前半)				(黒谷カミヤ窯跡) ニツ製オクダニ窯跡	1250 Ⅲ 期(後半)				黒谷ダイテンノウミ窯跡
I 期(後半)					Ⅳ 期				黒谷カミヤ窯跡
1200 Ⅱ 期				黒谷カミヤ窯跡 黒谷コシノミヤ窯跡 黒谷コシノミヤ窯跡	1300 V 期				湯土カミヤ窯跡
Ⅲ 期(前半)				湯土カミヤ窯跡	1350 Ⅵ 期				黒谷カミヤ窯跡
1250									

第7図 加賀焼略編年図(甕・壺 S = 1 / 24、片口鉢 S = 1 / 16)(注1文献より転載)



第8図 甕・壺・鉢組成図